

## 解説

小泉 純一

アメリカに移住し、そこで活躍したパレスチナ人はエドワード・サイードだけではない。サイードのようなエリートに限らず、移住先をアメリカに選んだパレスチナからのエグザイルは少なくない。レバノンの難民キャンプに逃れてきた両親の元に一九七三年に生まれたスヘル・ハンマードは、五歳でアメリカに家族で移住し、教育はアメリカで受けた。今回のエッセーでも書かれているように、アメリカの学校では、彼女の名前を正しく発音できる先生もいなければ、正しい発音を意識する先生もほとんどいなかったようだ。レバノンでの記憶は希薄らしいのだが、難民キャンプの生活で感じた恐怖感を忘れることはできないとも語っている。

一九世紀からキリスト教徒のパレスチナ人たちがアメリカに移住し、その後イスラエルにより土地を奪われた時期からこの国への移住を選ぶイスラム系パレスチナ人は増加した。ニューヨーク、サンフランシスコ、デトロイトなどの都市を中心にパレスチナ移民のコミュニティが形成されてきた。そうした移民の子ども達の中から、社会的に成功する者、芸術活動を目指す者達も現れ、特に詩人であればネオミ・シハブ・ナイやハンマードが注目を浴びている。ナイはパレスチナ人の父とアメリカ人の母の間に生まれている。一方、ハンマードは、わずかではあるがアラブでの生活の記憶があり、両親ともパレスチナ人であるだけに、子ども時代にアメリカでの生活や文化に馴染むのに時間がかかったことは疑う余地はない。今回その一部を訳出した『このお話の滴たち』は、自分のアイデンティティーを問う過程で、自分とアメリカ、アラブやイスラムなどの距離感を手探りしている自伝と考えてもいい。

ハンマード一家はマンハッタンの下町に移住し、父は雑貨店を経営した。学校で一緒になったのは、アフリカ系アメリカ人、イタリヤ系アメリカ人、プエルトリコ系アメリカ人などで、七〇年代のラップ文化の波を浴びてハンマードは成長した。父の商売が軌道に乗り、一家はマンハッタン郊外のスタテンアイランドの家に引っ越しをする。そこでご近所になったのは中産階級の白人層であり、ハンマードはまたそこでこれまでとは異なるアメリカを目にすることになる。しかしどこに行こうと変わらないものは、パレスチナ人であることに對する一般的な無理解であり、同時にマイノリティの存在を理解し、ハンマードを励ましてくれる先生や大人たちが少数ではあつてもいることだった。

コーランはこの世で一番素晴らしい詩だと母は語り、小さな娘に読み聞かせ、ほどなくハンマードは英語で書かれた文学作品を読みふけるようになり、自分で詩も書くようになった。大学に進学後、自分の人生をテーマとした詩を書き、この時期にあるイベントで行った詩の朗読をハールム・リバー・プレス経営者が目にして、詩集『パレスチナ人に生まれて、黒人に生まれて』と『このお話の滴たち』は同じ年にこの出版社から上梓された。しかしこの時期にはまだハンマードを詩人として知っている人の数は限られていた。

ハンマードが詩人として注目を浴びたきっかけは、マンハッタンでの同時多発テロとテレビの詩の朗読番組『デフ・ポエトリー』の力が大きい。テロの直後誰もこの事件を言葉にできる力を持ち合わせていなかった時期に、彼女が書いた「ファースト・ライティング・シンクス」(First Writing Since)は、事件への戸惑いや、恐怖、

受容がテーマとなり、マンハッタンに住む人たちの視点とパレスチナ系アメリカ人の視点から問題が捉えられていた。ハンマードはそれを友人五〇人にメールで送り、もらった者たちが知り合いに送り、そこからネットにアップされ、アメリカの公共放送サービスの『デフ・ポエトリー』の制作者の目に留まり、その番組に彼女

は出演し、この作品を朗読した。すらすらとして背が高く、浅黒い肌の精悍なハンマードがこの作品を朗読する姿は、作品の内容の面でも、そのパフォーマンスの面でも、社会の注目を集めた。この番組は数ヶ月後ブロードウェイで芝居として上演され、そこにもハンマードは出演する。この年のトニー賞にこの作品は選ばれ、彼女はトニー賞を受けた最初のパレスチナ人となった。

その後の彼女の活動は、イスラム系の集会で詩の朗読や、アラブ系の音楽家の演奏に合わせる朗読、ラップのミュージシャンとのコラボや、動画での作品の発表など、詩集を中心としたこれまでの詩人の活動とは異なっている。「書き言葉の詩人」に対し「話し言葉の詩人」というジャンルでくくられることもあるのだが、本人はそうにとらえてはいないし、彼女の詩の朗読を見る限りでは、伝統的な詩の書き方に即していると思える。但し、詩を声に変えるパフォーマンスも評価される詩人とは言え

るだろう。これは吟遊詩人を彷彿とさせ、詩の昔ながらのあり方に回帰しているとも思える。また社会のなかで女性の置かれた場所が作品のテーマとなることもあり、詩人にとどまらず、アクティビスト（社会活動家）として紹介されることが多い。

今回は『このお話の滴たち』を抄訳し、詩集『ザアタルの歌姫』(Zaatar Dira)から『わたしがすること』を訳出した。前者は自分の人生について思い悩む若い女性の自伝とも、散文詩とも言えるだろう。主要なイメージとなっている水は、冒頭ではハンマードをいらつかせる存在として否定的に描かれているのだが、女たちが大昔から流してきた涙でもあり、苛立や怒りの感情、夢の世界を支配する無意識の象徴ともとらえられる。肯定的とか否定的という次元を越え、善も悪も分け隔てなく、すべてを包み込み、存在を肯定するような何か、子宮の中の羊水にまでイメージは広がるのではないだろうか。ある程度若書きのそりは免れないと思うが、ハンマードのその後の作品を理解する上で欠かせない読み物であるだけでなく、ハンマードと同じような悩みを持つ女性にとっては、問題を整理し、力を与えてくれる作品であるだろう。ハンマード自身、自分が詩を朗読する姿を子どもたちが目にし、自分を女性が生きるモデルとしてくれることで、運命の力に負けずに生きる力を少女

たちに与えたいという気持ちを持っている。

『わたしがすること』は彼女の詩人としての力量を示している。余分な表現が無く、簡潔な美しさを持っている。また、『このお話の滴たち』で示されていた、男の言葉によってではなく、女の言葉で自分たちを表現したいという意識が具象化されている点で、詩人としての成長の証を見て取ることができるだろう。動画の番組TEDにもハンマードは登場しているのだが、そこで彼女はこの作品を朗読している。

二〇〇八年には、パレスチナ出身の女性監督、アンマリー・ジャーシルの映画『この海の塩』(The Salt of This Sea)にもハンマードは主演している。この作品はカンヌ映画祭の「ある視点」部門にノミネートされた。詩集は三冊出ているが、『ブレイキング・ポエムズ』(Breaking Poems)では、英語とアラビア語が併用され、これまでの英語による言葉の世界を攪乱しようと試みている。「力の文化に対する文化の力」を示すことを目的にパレスチナやイスラエルで年に一回開催されているパルフェスト(パレスチナ文字祭)にも定期的に招かれ、イスラエルによるガザへの攻撃を背景とした作品「ラファ」などの朗読を行っている。

